

平成 24(2012)年 4 月 5 日

日本民俗建築学会  
会長 杉本 尚次 殿

日本民俗建築学会奨励賞審査報告書

日本民俗建築学会 奨励賞選考委員会  
委員長



朴賛弼氏に対する奨励賞の選考結果を以下の通り報告します。

1 選考結果（贈賞の可否など）

朴賛弼<sup>パクチャンピル</sup>氏の業績は、奨励賞を贈賞するに相応しいものと判断する。

2 理由（評価、特記事項など）

記憶の銀幕に残るふるさとの山河は「美しい」。いや、「美しかった」。それは誰もが心の記憶に留め、今はもう見ることのできないはずのものであった。朴賛弼氏の場合も失われた原風景はゴムシンとともに決して戻りはしないものであった。しかし…。

朴氏は、利便性を追求し尽くした近代都市において、蓋を被せられ、更に高架道路が掛け渡されたソウルの象徴である「清溪川<sup>チンソクガン</sup>」の再生について、自らの専門分野である歴史と環境工学の観点から、広く一般の人々に向けてその挑戦を語り掛けた。

本書は、このように研究者だけではなく都市を使う全ての人々、さらには韓日同時刊行を行うことで、広く内外一般の読者に対してこの事業が及ぼした意味を知らしめた点で、影響は極めて大きく、将来に渡って韓日をつなぐ固い絆の架け橋となることは間違いないであろう。

本業績が語る内容は、一見、本学会の趣旨とはやや趣向にそぐわないものとも思われがちでもある。しかし、著者が幼少期において近しく親しんだ住環境の積極的な保全との観点から見れば、本書に関わる事績は本学会として、学術文化の向上と普及、発展に寄与するところは極めて大きいものと認めることができる。更に、氏による韓日両国における今後の活躍も十分期待され、本業績は両国相互の発展及び、世界的に見ても将来における都市の在り方に対して有意義な示唆を与えている。

よって、ここに 2012 年における日本民俗建築学会奨励賞として、本業績を選定するものである。